

『公認心理師ベーシック講座 神経・生理心理学』

正誤表

(2024年11月19日現在)

上記書籍に誤りがありました。訂正し深くお詫び申し上げます。刷数は奥付に記載しています。

第3刷用 p.1

第2刷用 p.2,3

第1刷用 p.4~

【第3刷用】

本書 P.1 図 1.1 右下の語句 2 か所に「・求心性」を追加

誤：交感神経（遠心性）

副交感神経（遠心性）

正：交感神経（遠心性・求心性）

副交感神経（遠心性・求心性）

P.79 11行目

誤：5度/秒

正：50度/秒

P.107 12行目

誤：反応する細胞

正：反応する神経節細胞

P.117 5行目 「下部」を削除

誤：視床下部

正：視床

P.122 下から8行目

誤：(等脳性),

正：(等能性),

【第2刷用】

P.1 図 1.1 右下の語句 2 か所に「・求心性」を追加

誤：交感神経（遠心性）

副交感神経（遠心性）

正：交感神経（遠心性・求心性）

副交感神経（遠心性・求心性）

P.34 113 行目

誤：この発見自体は

正：この性質の違い自体は

P.79 11 行目

誤：5 度/秒

正：50 度/秒

P.107 12 行目

誤：反応する細胞

正：反応する神経節細胞

P.117 5 行目 「下部」を削除

誤：視床下部

正：視床

P.122 下から 8 行目

誤：(等脳性),

正：(等能性),

P.177 最下行

誤：新しいタイプの神経細胞を発見した

正：新しいタイプの神経細胞であるミラーニューロンを発見した

P.178 6 行目

誤：観察される行為と実行される行為は

正：観察される行為と実行する行為は

P.179 16行目

誤：開発し、幼児期の心の理論獲得

正：開発し、**ヒト**の幼児期の心の理論獲得

P.182 14行目

誤：脳活動の同期も調べることが

正：脳活動の同期**を**調べることが

P.188 12-13行目

誤：低次経路はすばやいが…という違いがある。低次経路により…

正：**そして**、低次経路はすばやいが…という違いがあり、低次経路により…

【第 1 刷用】

P.1 図 1.1 右下の語句 2 か所に「・求心性」を追加

誤：交感神経（遠心性）

副交感神経（遠心性）

正：交感神経（遠心性・求心性）

副交感神経（遠心性・求心性）

P.12 11 行目

誤：人生へのはじまり

正：人生のはじまり

P.13 10 行目

誤：は脳にあると考えた。彼の思惟は…（中略）…があるとする説である。

正：は脳にあると考えた。当時、世界の実体は四大元素（地・風・火・水）で構成され
るとする考え方が広く支持されていたが、ヒポクラテスは多くの生体観察結果を背景に、
生体を流れる液体に四つのタイプがあること、すなわち四体液説（血液、粘液、黄胆汁、
黒胆汁）を唱え、この時代の哲学・医学者に大きな影響を与えた。

（「彼の思惟は…」以降の段落を上記に修正）

P.18 8 行目

誤：運動性言語野またブローカ野と

正：運動性言語野またはブローカ野と

P.34 113 行目

誤：この発見自体は

正：この性質の違い自体は

P.40 9 行目

誤：1929 年に脳波と認められた。

正：1929 年に最初の論文を公表した（図 4.2）。

P.49 10-11 行目

誤：現する。脳波は、器質的脳障害以外に、睡眠時無呼吸症候群の評価に不可欠な診断
法になっている。認知症では徐波成分（ θ 波）が多くなる。なお、…

正：現する。認知症では徐波成分（ θ 波）が多くなる。自発脳波は、器質的脳障害以外
に、睡眠時無呼吸症候群の評価に不可欠な診断法になっている。なお、…

P.51 図 4.10

誤：図に P200 なし

正：P200 を挿入

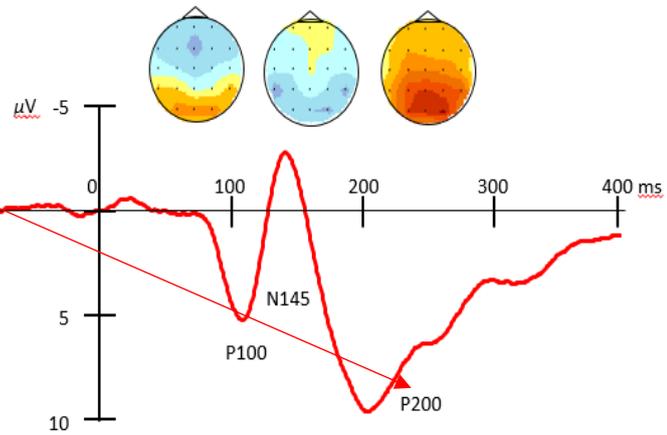


図 7 視覚誘発脳波の主要成分とその電位

P.72 9 行目

誤：強膜の露出面積が広いことにある³⁾。つまり、ヒトの眼は…

正：白い強膜の露出面積が広いことにあり³⁾、その中に黒い瞳がある。つまり、ヒトの眼は…

P.73 4-6 行目 以下の文章を削除

削除：視細胞の興奮は神経節細胞・視神経・外側膝状体を経て第一次視覚野に到達する。

P.73 21-22 行目

誤：(視覚情報処理については第 8 章を参照されたい)。

正：(視覚情報処理には、外側膝状体を介する経路の外に、上丘・視蓋前域や視交叉上核を介する経路がある、詳細は第 8 章を参照されたい)。

P.73 28 行目

誤：(図 6.3)。周辺視野

正：(図 6.3)。したがって周辺視野

P.73 図 6.3

誤：点線が中心窩の線まで伸びている

正：点線は赤いラインまで

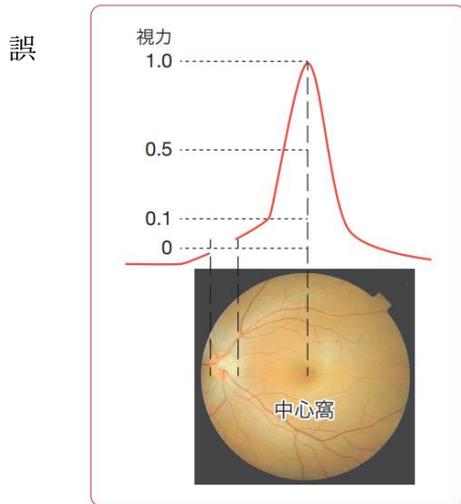


図6.3 網膜と視力

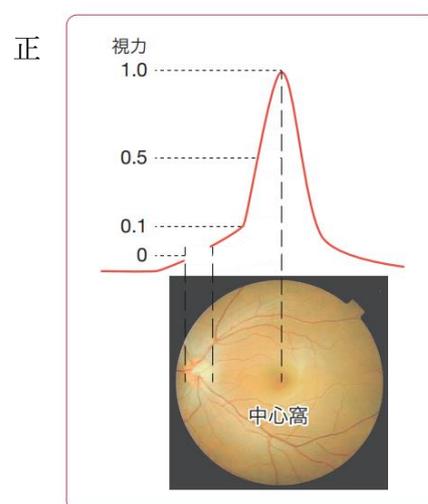


図6.3 網膜と視力

P.74 11-13 行目

削除：頭頂葉へは，視覚のみならず後頭葉頭頂葉へは，視覚のみならず…（中略）…
ともいわれる。

正：後頭葉視覚野からの信号は，いくつかの経路で前頭眼野に送られる。

P.74 16 行目

削除：後頭葉視覚野からの信号は，いくつかの経路で前頭眼野に送られる。

挿入：頭頂葉へは，視覚のみならず，複数の感覚情報が入力し，それらの情報は統合される。この領域は頭頂連合野ともいわれ，注意制御の中枢でもある。後頭葉の腹側経路からは…

P.74 27 行目

誤：入力され

正：入力し

P.74 28 行目

誤：入力される。

正：入力する。

P.76 2行目

誤：眼球運動に関わる神経核が、3つある。

正：眼球運動に関わる神経核が3つあり、

P.76 23行目

誤：ヒトの目は

正：ヒトは

P.78 図 6.6

誤：図の中に「ドリフト」がない

正：「ドリフト」を右のように入れる

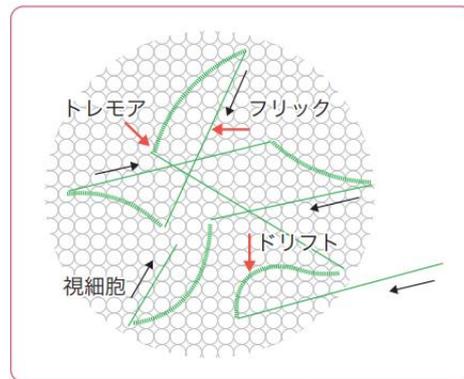


図6.6 固視微動
(Pritchard, 1961)

P.79 11行目

誤：5度/秒

正：50度/秒

P.79 下から4行目

誤：…定加速度かつ定方向に…

正：…一定加速度かつ一定方向に…

P.82 8-9行目

誤：電圧が徐々に減衰して落ち着くので

正：電圧の変化を比較的忠実に反映するので

P.85 15行目 図 6.4 の本文挿入個所を、p.87 に移動

誤：有用な方法となっている。(図 6.4)

正：有用な方法となっている。

P.87 1行目

誤：された⁹⁾。

正：された⁹⁾ (図 6.4)。

P.89 8行目

誤：身体に現れる変化,

正：身体に現れる生理反応,

P.90 22-23行目

誤：体神経の運動神経は中枢から出たら神経節を介することはないが、自律神経には神経節がある。…

正：(この文章を、このパラグラフの冒頭へ移動)

体神経の運動神経は中枢から出たら神経節を介することはないが、自律神経には神経節がある。自律神経の節前ニューロンは…

P.96 4行目

誤：心室の興奮から、次の心室の興奮開始まで

正：心房の興奮から、次の心房の興奮開始まで

P.105 16-18行目 以下の文章を削除

削除：従来、光受容…(中略)…ことが報告された¹⁾。

P.107 6-7行目

誤：膝状体系視覚伝導路から分かれて、視床下部にある視交叉上核・上丘

正：膝状体系視覚伝導路との共通経路を離れ、上丘・視蓋前域…

P.107 7-8行目 以下の文章を削除

削除：視交叉上核は光刺激による概日リズムに、

P.107 14行目の後に、新たに以下の赤字の1段落の文章を挿入

正：これを盲視 (blind sight) という。

従来、光受容細胞は錐体細胞と杆体細胞の2つと考えられていたが、2000年以降、光に反応する神経節細胞(内在性光感受性網膜神経節細胞)が発見された。この細胞の信号は視床下部の視交叉上核に入力し、概日リズムを作ることに寄与している¹⁾。

P.110 22 行目

誤：33 mmほど管に

正：33 mmほどの管に

P.115 8 行目

誤：刺激によって生じる患者の口頭報告をまとめて

正：刺激によって生じる知覚の口頭報告をまとめて

P.117 5 行目 「下部」を削除

誤：視床下部

正：視床

P.122 下から 8 行目

誤：(等脳性),

正：(等能性),

P.135 7 行目

誤：記憶には、「保持」と「検索」の 2 つの過程があるが、

正：記憶には、「記銘」・「保持」・「想起」の過程があるが、

P.135 9 行目

誤：記憶の形成には、第 9 章で…

正：「記銘」には、第 9 章で…

P.147 15 行目

誤：患者は…

正：脳梁を離断した患者は…

P.149 23 行目

誤：分割脳研究により

正：分離脳研究により

P.158 図 11.5

誤：反応カードに色がない

正：十字に色を付ける

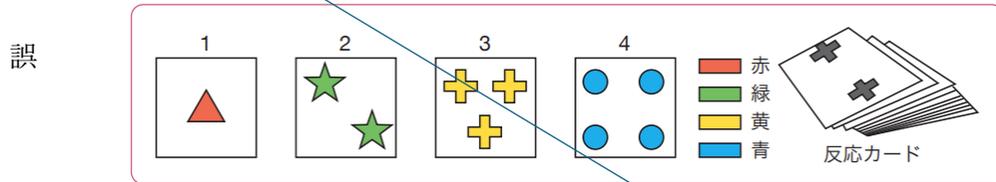
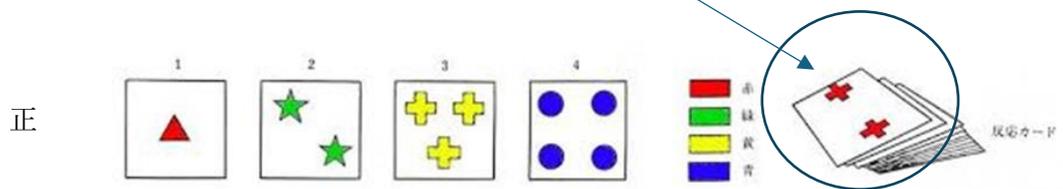
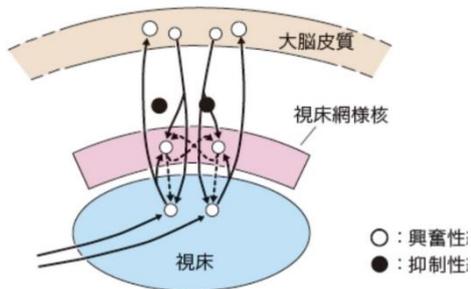


図11.5 ウィスコンシンカード分類課題

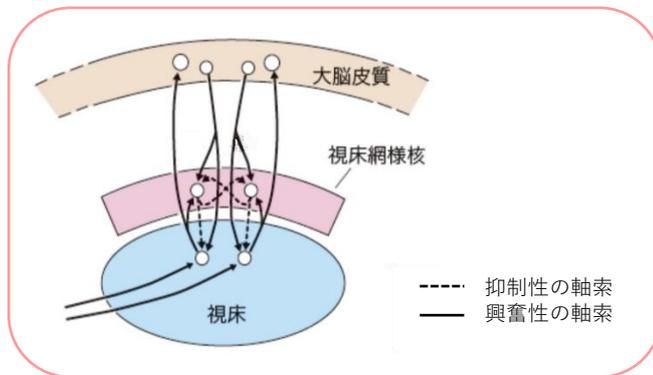


P.164 図 11.10

誤：黒丸が上方にある



正：・黒丸を削除する
・図の右下にある線の説明文を変更



P.166 13行目

誤：7野は体性感覚・視覚

正：上頭頂小葉の7野は体性感覚・視覚

P.167 4行目

誤：下頭頂小葉領域の損傷では、

正：下頭頂小葉領域の**病変**では、

P.169 図 11.14 脳の場所の名称と機能の説明を修正

誤： 正：

側頭頭頂接合部 → 後頭領域

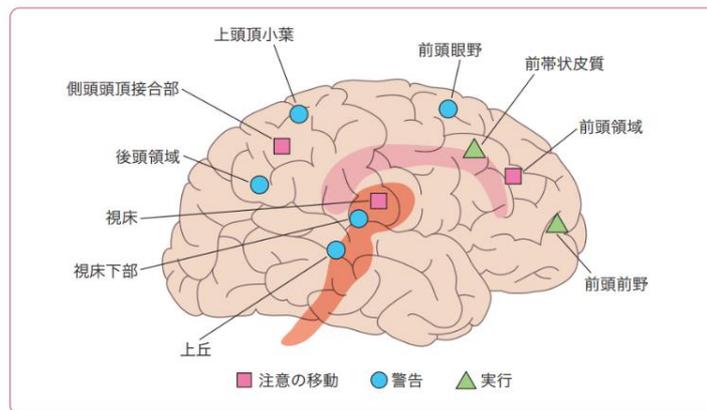
後頭領域 → 側頭頭頂接合部

視床下部 → 視床枕

誤：□注意の移動 ○警告 △実行

正：□警戒 ○注意の移動 △実行機能

誤



正

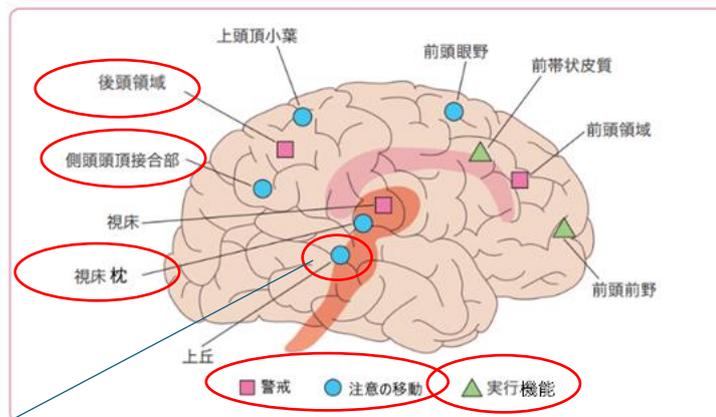


図 11.14 注意に関わる脳部位¹³⁾

青○：もう少し上に移動する

P.169 10-14 行目の文章を以下に差し替え

誤：視覚連合野と背側注意ネットワークは相互に影響しあっている。また、前頭眼野と頭頂間溝の間には双方向の影響が観察されており、そうした意味では、背側注意ネットワークは能動的注意と刺激のオンオフなどによる受動的注意の両方に関わっているといえよう。

正：この背側注意ネットワークには、視覚野と前頭眼野を結ぶ双方向回路が組み込まれている。視覚入力による眼球運動の観点からみると、能動的注意だけではなく、刺激駆動の受動的注意にも関わっているといえよう。

P.177 最下行

誤：新しいタイプの神経細胞を発見した

正：新しいタイプの神経細胞であるミラーニューロンを発見した

P.178 6 行目

誤：観察される行為と実行される行為は

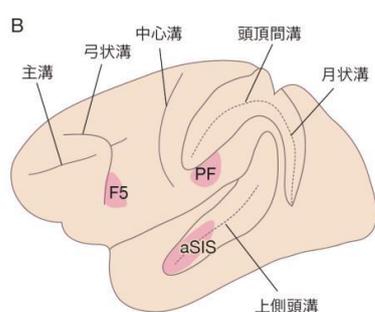
正：観察される行為と実行する行為は

P.178 10 行目

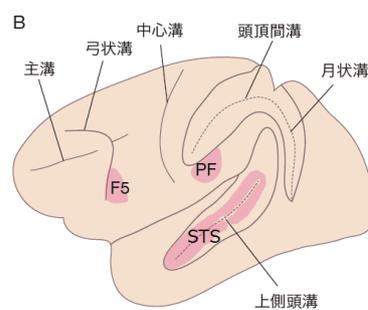
誤：上側頭溝前部の aSTS 領域の 3 つの…

正：上側頭溝 (STS 領域) の 3 つの…

誤)



正)



(図の訂正内容)

- ・ aSIS → STS
- ・ STS の領域を、点線の上側頭溝を取り囲むように拡大

P.179 16 行目

誤：開発し、幼児期の心の理論獲得

正：開発し、ヒトの幼児期の心の理論獲得

P.182 14行目

誤：脳活動の同期も調べることが

正：脳活動の同期を調べることが

P.188 12-13行目

誤：低次経路はすばやいが…という違いがある。低次経路により…

正：そして、低次経路はすばやいが…という違いがあり、低次経路により…

P.209 14行目

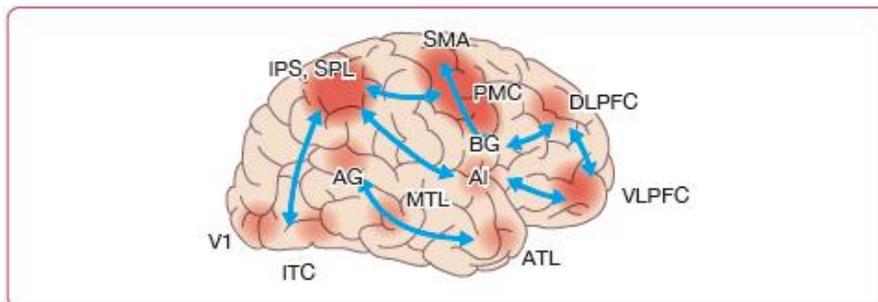
誤：この左弓状束の希薄化などが指摘されている。

正：この弓状束を介した相互連絡の機能障害が指摘されている。

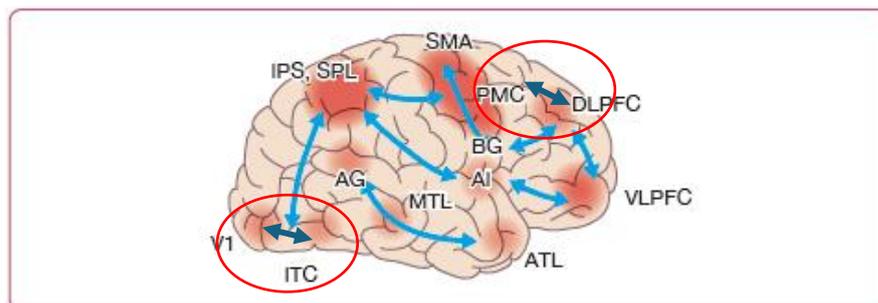
P.209 図 15.4

正：PMC と DLPFC との間、および V1 と ITC の間に以下のように矢印を追加

誤



正



練習問題の答え

第6章

誤：1. a, c

正：1. c, d